

呂后

觀世弥次郎作

ワキ 文帝の臣

シテ 文帝

ツレ（女） 呂后

ツレ（男） 韓信

同 彭越

地は 唐土

季は 雑

「抑是は漢の文帝に仕へ奉る臣下なり。さても此君と申すは。漢の高祖の第二の御子にて御座候ふが。兄孝恵の帝崩御の後御位に即かせ給ひて候。又こゝに父高祖第一の後。御名を呂后と申し候ふが。此間以ての外御病氣にて御座候。さる間医師数を尽し。医療様々にて御座候へども。更に其験もなく候。けふも皆々参内申し。御容体をも伺ひ申さばやと存じ候。

「それ明君の威徳には。四海安全に民栄え。思ふ事なき御代ながら。げにや浮世の習とて。かく類なき翠髪美麗の。花の形も今は早。うつろふ色の増鏡。

「曇りがちにて打ち向ふ。影をも未だ厭ひつゝ。

「いさゝめの。仮なる世ぞと思へども。く。更に驚く夢の間を。猶待遠に春風の。まだき梢を何とたゞ。夕べくと誘ひ来て。花にはつらき風なら

ん。く。

ワキ詞

「是は不思議なる事どもにて候ふ程に。此由を主上へ奏し奉らばやと存じ候。

シテ

「如何に誰かある。

ワキ

「御前に候。

シテ

「唯今肉塊といふ化生の者来り。後に障碍をなすとは誠に有るか。

ワキ物語

「さん候俄に天地鳴動して。一つの肉塊躍り廻る。

目も口もなし。切りたゝけば切りたる処口と成りて。呂后を罵つて曰く。我は是韓信彭越が亡魂なり。さても奢れる秦の始皇を討ち平らげ。感陽宮に疾く責め入り。漢の天下となす事も。皆是韓信彭越が忠節なり。しかのみならず。項羽五十万騎の軍兵を引き具し。西の方楚国より。鴻溝西まで打つて上らせ給ひ。既に高祖もあぶなかりしを。韓信彭越が一命を軽んじ軍して。烏江の河の辺に

て項羽が頸を刎ね落し。高祖に捧げ申し、時。此
兩人の忠臣を。一丈に壇を築き三度礼し給ひしを。
呂后は知し召されずや。かく大忠の者共を。呂后
の讒言深きにより。雲夢沢にて鷹狩と号し。たば
かりおめくと召し捕られ。都へ引きのぼせられ
恥を漢家にさらし。長樂宮にて切られし事。ひと
へに呂后の口ゆゑなりと。大音声にて呼ばりぬ。
なんぼう恐ろしき御事にて御座候。

シテ「是は不思議なる事どもにて候ふ物かな。如何に呂
后。たとひ魔縁の障碍ありとも。王位に若く事よ
もあらじ。唯御心を強く持ち。猶良薬を用ひ給へ。
女カ、ル「げに恐ろしや目の前に。さまぐ見えし化生の姿。
今は命の限ぞと。思ひ乱るゝ露の身の。置き処な
き心かな。

シテ「さらでだに弱きに弱き青柳の。

女「いと苦しさも身一つの。

シテ「思ひの色は。

女「それぞとも。

地「いはん方なき身の行末。く。あまりになれば何とわが。心の奥は知られなん。よしや為しつる我とがの。因果のめぐる小車の。やるかたなや身の苦しみ。見るに涙も留まらず。

クセ「げにや人目のみ。しげき深山の青つぐら。苦しき世をも。思ひわびぬる。身はいつまでの。果しは

かなみかくばかり。浮名に残らんは。げにつゝま
しき心かな。

シテ「春くれば柳の糸も解けにけり。

地「結ばゝれたる我心をば。思ひ知るらん夕暮の。月も移ろふ宮の内。心もすめる折からや。いとゝあはれの。猶身にしめる気色なり。

シテ「かくて宮中物さびて。心をすめる折ふしに。不思議や晴天かきくもり。雷は忽ち震動して。大雨し

きりに降り来り。身の毛もよだつ折ふしに。

上地

「大いなる雲南殿の。庭上にこそ顕れたれ。

地

「不思議や雲の内よりも。く。あたりを払ふ大魚

の上に。大船あらはれ船中を見るに。おのく怨

霊あらはれたり。

セキ

「我は知らずや。戚夫人とて。帝の寵愛浅からず。

花と争ふ装ひを。

地

「三毒の風に落花となす。それのみならず趙王まで。

殺し給へば其仇を。報ぜんために来りたり。

ツレ二人

「是は高祖の兵に。韓信彭越とて。大忠の者。呂后

の讒言に身を失ひし。恨み申しに顕れたり。

地

「とりぐ恨みを申し上げ。く。忽ち呂後の命を

取らんと。各呼ばゝるその声は。天地も響くばかりなり。

シテ

「文帝是を見るよりも。

地

「文帝是を見るよりも。天地の間に何者か。王位を

侵さんと夕塩の。御剣を抜き持ち。呂后を囲み待ちかけ給へば。おのく雲よりおり立ちて。呂后を取らんと進む中にも。恨みは数々。胸にも戚夫人。せきあへぬ此身の思ひかな。

二人「韓信彭越打物を振り上げ。

地「韓信彭越打物を振り上げ。玉体にかゝれば。主上は剣を取り直し給ひ。かの怨霊と戦ひ給へば。よき隙なりと戚夫人。呂后の御手を取つて。行かん

とするを。文帝走り寄り押し分け給ひ。剣を振り上げ刺し通しく。投げ捨て給ひ。残れる霊鬼を追つゝめ切り立て。透間をあらず戦ひ給へば。王位に恐れ。虚空をさして上りけるが。今より後は来るまじと。呼ばゝる声も雲中に聞え。く。五更の一点も明けにけり。